

埃の郷に在った

「種篋」と云う駅名に就いて

渡邊 通

現在の広島県廿日市市域が「埃野又は可愛」と呼ばれていた古代に、此処に山陽道の駅舎があり、延喜時代(九一二)には、種篋(ウエハラ)と記されていた。

その具体的な位置と呼称の由来に就いては久しく議論があつた。芸藩通誌所載の平良村図面は不明瞭であつたが、宮内出身の杉山赤富士氏の努力により、文政二年に平良村が提出した原図面が国会図書館で発見され、駅舎等の位置が確認された。駅舎は上(カミ)平良で平良川の右岸に、厩舎は下(シモ)平良で川の左岸に在った。(廿日市の文化第一〇集)。
しかし、赤富士氏は此の段階で不幸、死去された。

筆者は、赤富士氏の研究を承けて、駅名の決定由来を、左の通りだと推論する。

第一が、駅名は、和銅六年(七一三)の風土記編集令に依つて、佳名二文字に依つて表記され、駅名が公表されたのは、延喜時代である。

「上(カミ)」は「ウエ」と言い換えて、「種」の一字を以て表記し、「平良(ハラ)」は「篋(ハラ)」の一字に短縮し、合せて二字に収めた。「カミ」を「ウエ」と云い換えた理由は、交通

関係職員の通念では、「カミ」は近畿地方を指すので、混乱を避けたものと思われる。ただ、種と篋の両文字が佳字か否かは、田舎者には判らなかつたもので、二文字にしたことで安心したものでらう。

第二が、何時、この駅名が決定されたかである。勿論、平良、原の谷が階段状に改造された以後である。筆者は現在、この谷合いの開拓史を執筆中であるが、十二代景行天皇の時(三〇〇頃)、佐伯部が東北より来住した以後で、推古天皇の端正五年(五九七頃)に佐伯部の長官、佐伯鞍職が畿島神官として転出した以前である。

又、開発終了後の「埃野又は可愛」と云う古名は「原、上平良及び下平良」と変つた。大まかに云えば、五〇〇年頃であらう。七三八年頃の国分寺名「平楽寺」がこれを実証している。

(一九九八・二・二四)

廿日市の民話

観音山の天狗

昔、原村の人達は、夏時分は田畑の仕事で、冬時分は山仕事で暮らしを立てていました。

山に入ると家に帰らないで、山小屋を建てて、米や味噌を持って行き、寝泊りをして山仕事をしていました。所によつては、小屋に入ると漬物の臭いがしたとか。

ある冬のこと、二人の農夫が観音山(極楽

寺山の別名)へ木を伐りに山に入った時のお話です。

ある日、昼飯のあとあまりにも退屈なので三鬼堂(宮島大聖院と極楽寺の和尚さんが懇意だつたので極楽寺にもお堂を建て祀られた)にあつた鼻高面(天狗面)を一人がかむり、一人が鈴懸を持ち出して、舞を舞つて遊びました。その夜のことです。急に大雨大風となつて、バリバリツと大きな木が倒れる音がするし、山小屋の板は吹き飛ばされるし、二人は大慌てで藁をかぶつて命からがら山を下りて家に帰りつきました。

次の日、大鋸などの道具が置いてあるので取に行つてみると、これはどうしたことか何事もなかつたように山小屋はそのままであるし、木も倒れていません。みんな元の通りで何も変わっていません。さては天狗さんが罰(バチ)を当てられたのだつたと、二人は顔を見合わせたそうです。

この辺では天狗のことを狗寶(グヒン)さんといつて、尊敬をしていました。狗寶さんは、敵島と観音山を一つ飛びで行き来しておられました。大きな松があると、天狗の腰掛け松と云つて、伐つてはいけなないと云われていました。今は枯れて無くなつていますが、廿日市には三本の有名な天狗松がありました。天神様の境内と住吉社の所に枝が横に伸びた松と廿日市給食センターの所に光井の天狗松があつたといわれています。(原の故河原盛氏(明治三十六年生れ)より聞いた話) 山手